

THE AGE TO COME

科学が拓く明るい長寿社会

Report on Nobel Prize Dialogue Tokyo 2019
ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 報告書

主催：  JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE
日本学術振興会

開催概要	p.2
主催者開会挨拶	p.3
プログラム	p.5
ダイアログの一日	p.6
パネリスト	p.9
参加者データ	p.13
アンケート結果	p.14
主催者	p.15
運営委員会	p.16
パートナー企業等	p.17
広報活動実績	p.18
制作物	p.19
ノーベル・ウィーク・ダイアログと日本開催の経緯	p.20

当日の様子は以下の URL からご覧いただけます。
<https://www.youtube.com/nobeldialogue>



ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 は、若手研究者や産業界を含む広く一般を対象に、国内外のノーベル賞受賞者 5 名を含む 19 名の著名な研究者・有識者に登壇いただき、公開での講演やパネルディスカッション等を通じた科学と社会との対話を実施したものです。学術・科学技術への社会の関心・理解度を高め、科学技術・学術の振興に寄与することを目的としています。当日は、1,000 名の参加者にご来場いただくとともに、インターネットによるライブ中継を行い、世界中の視聴者に議論の様子が配信されました。

(<https://www.youtube.com/nobeldialogue>)

ノーベル・プライズ・ダイアログ東京は、ノーベル財団の広報を担うノーベル・メディア AB がスウェーデンにおいて 2012 年から毎年ノーベル賞授賞式の前日に開催している一般向けの公開シンポジウム、“Nobel Week Dialogue”（ノーベル・ウィーク・ダイアログ）を日本で開催するものです。2015 年 3 月に、スウェーデン国外では初めてノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2015 として日本において実施されました。その成功を基に、2017、2018 と回を重ね、今回は 4 回目の開催となります。

本ダイアログは、日本学術振興会とノーベル・メディアとの密接な協力関係の下、開催されたもので、学術分野における日本の国際的なプレゼンスを高める上で重要な機会となりました。また、ノーベル賞受賞者をはじめとする著名な研究者・有識者が一堂に会し、社会一般と対話する貴重な機会となり、学術に対する社会の関心・理解度を高めるといった目的を達成した画期的な科学コミュニケーション活動となりました。

本報告書は、本ダイアログの概要についてとりまとめたものです。社会一般の皆様が科学技術・学術に対する関心を高めていただくとともに関係者各位に広くお役立ていただければ幸いです。

1. 会議の名称

和文名：ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019

英文名：Nobel Prize Dialogue Tokyo 2019

2. 主催

独立行政法人日本学術振興会／ノーベル・メディア AB

3. 開催日時

2019 年 3 月 17 日（日）10:30～17:00

4. 開催場所

パシフィコ横浜 会議センター（神奈川県横浜市西区みなとみらい 1-1-1）

5. テーマ

和文名：The Age to Come 科学が拓く明るい長寿社会

英文名：The Age to Come



里見 進

独立行政法人日本学術振興会 理事長

皆様、おはようございます。ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 の開催にあたり、主催者を代表してご挨拶申し上げます。日本学術振興会理事長の里見進です。

スウェーデン国特命全権大使マグヌス・ローバック閣下、柴山昌彦文部科学大臣、ノーベル賞受賞者の皆様、パネリストの皆様、ご列席の皆様、本日は、ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 にお集まりいただき、心より御礼申し上げます。

本日の開催にあたりましては、ラーシュ・ヘイケンシュテン専務理事が代表を務めるノーベル財団、ローラ・シュプレヒマン CEO 代行をはじめとするノーベル・メディアの皆様からの温かなご理解と誠意あるご協力を賜りました。また、特別スポンサーの株式会社ナガセ様、株式会社ヤクルト本社様、スポンサーの花王株式会社様をはじめ、多くの企業・団体からの多大なるご支援を賜りました。関係各位の皆様のご理解とご協力に心から感謝申し上げます。

日本学術振興会は、天皇陛下の御下賜金により昭和 7 年（1932 年）に創設されて以来、80 余年にわたり、学術研究の振興に不可欠な諸事業を実施してまいりました。このノーベル・プライズ・ダイアログ東京は、広く一般の方に、学術・科学技術への理解を深めてもらうことを目的としています。元々は、毎年スウェーデンにおいてノーベル賞授賞式の前日にノーベル・メディアが実施している「ノーベル・ウィーク・ダイアログ」に端を発するもので、日本での開催は 4 回目となります。

この度のノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 は、「科学が拓く明るい長寿社会」をテーマとしております。このように多くの皆様が、長寿社会に学術・科学技術がどのように貢献しているのかについて大きな関心を寄せてくださっていることを目の当たりにして、日本学術振興会の理事長として、大変ありがたく存じております。

本日は、国内外から 5 名のノーベル賞受賞者を含む 19 名の傑出した有識者の先生方をお招きしております。長寿社会における生き方や高齢者のための技術革新、老化防止にかかる最先端の研究について、どのようなお話を伺えるのか、今から大変待ち遠しく思っております。先生方におかれましては、ご多忙の中、本ダイアログへのご出席を賜り、心から感謝申し上げます。

高齢化が著しく進展している日本には、今、世界中の眼差しが注がれています。そのような中で、我々が長寿社会に係る問題にどう立ち向かい、どう解決してゆくか、文字どおり世界の英知を結集して、様々な対話がなされることは大きな意義があると思います。きっと、本日のダイアログは、我々人類の未来社会に向けた貴重な示唆となることでしょう。

それでは、皆さん、ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 をお楽しみください。ありがとうございました。

※本稿はノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 当日の開会挨拶を翻訳したものです。



ラーシュ・ ヘイケンシュテン

ノーベル財団 専務理事

Photo: Kari Kohvakka

ご来賓の皆様、ノーベル賞受賞者及びパネリストの皆様、そしてご来場の皆様、おはようございます。

日本で開催されるノーベル・プライズ・ダイアログは4回目、私が挨拶するのも4回目となります。初めて挨拶をさせていただいたのは2015年。スウェーデン国外で、このダイアログのイベントを初めて行った時でもありました。

以来多くの国で、今年には既にサンティアゴで、春にはマドリッドでも開催いたしますが、日本は科学の伝統があり、多くのノーベル賞受賞者が輩出された国であり、ノーベル賞受賞に対する関心が高く、最初の開催国として非常にふさわしい国でした。

さらに日本には科学を、また科学者を推進する日本学術振興会というパートナーがおりました。共に私どもは、いろいろな行事をしてまいりました。里見理事長、また他にも長年に渡りご協力をいただきました皆様、ありがとうございます。

この開会の挨拶にあたりまして少し歴史的な背景をご紹介しますと思います。全てはアルフレッド・ノーベル氏から始まりました。彼はスウェーデンの科学者であり、ダイナマイトを発明し大きな事業を確立した起業家でしたが、それだけではありません。彼は人間の能力を強く信じた啓蒙家でもありました。文化や哲学を含め幅広く関心を持ち、平和運動に熱心に取り組んでいました。

1896年に彼の遺言が明らかにされ、彼の私財を売却し、人類の為に最も貢献した人々に賞を授与してほしいという希望が発表され、彼自身が指定した、物理学、化学、医学、文学、平和の分野に賞が授与されることに決まりました。後に経済学賞が追加されました。このアルフレッド・ノーベルの名を冠するこの賞を授与するとき、私たちは強く信じています。もしも、科学・人道的価値を重んじる社会を築ければ、またそうすることに投資するとともに、平和と協力の精神を保持して取り組めれば、世界はもっと良くなると。

この賞はこの117年間900名を超える受賞者を生みました。そして、皆さんご存じのように日本には27名のノーベル賞受賞者がおり、そのうち23名は科学の分野で受賞されています。

今日ノーベル賞は他に類をみない賞となりました。ブリタニカ百

科事典によりますと、世界で最も権威のある賞だと説明されています。ノーベル賞に関わっている私たちにとってこれは大きな責任を意味します。アルフレッド・ノーベル博士が懸念してきたことが昨今現実となっています。長く民主主義を守ってきたこの世界においても科学が脅威にさらされており、例えば気候変動を否定する人もいます。平和と人道的価値も脅かされています。ノーベル賞は、だからこそこれまで以上に象徴としての重要性が高まっています。

申し上げたようにアルフレッド・ノーベル博士は人類への貢献者を表彰したいと望んでいました。つまり彼はただ単なる賞を授与したいわけではなく、この賞を通して何かを達成したいと思う目的があったわけです。ノーベル賞のことを知っていただく活動を行うにあたり、我々はこれを常に肝に銘じています。もちろん、私たちはアルフレッド・ノーベル博士やノーベル賞、多くの受賞者やその功績の情報を提供しますが、それは知識を広げるためだけではありません。特に若い人に刺激を与え鼓舞することで、科学に専心し、人道的価値を守り世界平和を目指してほしい。そしてより良い世界をつくらせたいと望んでいます。その思いから、私たちはノーベル・プライズ・ダイアログというこのイベントを開催しています。

今日は「The Age to Come 科学が拓く明るい長寿社会」というテーマを掲げました。まさにノーベル・プライズ・ダイアログにはぴったりです。あらゆる分野の科学の進歩と生活の変容、これによって各地の人口構成が劇的に変わりました。私たちは長生きするようになりました。もちろんこれは良いことです。しかしこれによって課題も生じます。「誰もが長生きしたい。しかし誰も老いたくはない。」これはベンジャミン・フランクリン氏の言葉です。私たちは老いても楽しく生きるにはどうしたらいいのでしょうか。経済的に機能し、また世代間の絆を維持していくために、私たちは社会をどのようにすればいいのでしょうか。こういった疑問は科学的な面もありますが、同時に人間性や倫理的な問題とも深く関わっていますし、平和の問題にもつながります。

今日はノーベル賞受賞者と、それからこの長寿の分野でご活躍の研究者の皆様、そして一般の方やいろいろな意思決定者の皆様と共に考えたいと思います。今何が起きているのか、そして、個人及び社会として向き合うべきどんな課題があるのか、一緒に考えましょう。対話こそが今日のポイントです。壇上の講演者同士だけではなく、会場にいらっしゃる皆様とも、そしてウェブキャストオンラインやソーシャルメディアでご参加の皆様とも対話をしたいと思います。対話こそが本当の変革への道だと信じております。

繰り返しになりますが、日本における第4回目のノーベル・プライズ・ダイアログに、ご参加いただきどうもありがとうございます。

※本稿はノーベル・プライズ・ダイアログ東京2019当日の開会挨拶を翻訳したものです。

1. オープニング

10:30 開会挨拶
独立行政法人日本学術振興会、ノーベル財団、文部科学省

2. 長寿化と社会

10:45 導入講演「人口高齢化を重視すべき理由」
サラ・ハーバー

11:00 パネルディスカッション「長寿社会における生き方」
アンガス・ディートン、秋山 弘子、齋藤 安彦、モデレーター：アダム・スミス

11:20 インタビュー「人に寄り添う革新的サイバニクス技術」
山海 嘉之、インタビュアー：サラ・ハーバー

11:35 対話「21 世紀における罹患率と死亡率」
アンガス・ディートン、アン・ケース

3. 長寿化と科学

11:55 パネルディスカッション「なぜ私たちは歳を取るのか」
エリザベス・H・ブラックバーン、ティム・ハント、トム・カークウッド、モデレーター：アダム・スミス

12:15 対話「楽しく賢く歳を取る」
ティム・ハント、川島 隆太、モデレーター：藤垣 裕子

12:30 講演「パーキンソン病原因解明への挑戦」
ランディ・シェックマン

12:45 昼休憩

4. 長寿社会における挑戦

14:10	分科会 1	分科会 2
	1 A：生命科学 「長寿に関する研究の最先端」 ランディ・シェックマン、トム・カークウッド、高橋 淑子、 モデレーター：アダム・スミス	2 A：社会 「幸福に長生きできる社会とは」 アンガス・ディートン、サラ・ハーバー、岩本 康志、 モデレーター：藤垣 裕子
14:55	休憩	
15:10	分科会 1	分科会 2
	1 B：健康 「健康寿命を延ばすには」 エリザベス・H・ブラックバーン、伊藤 裕、トム・カークウッド、 モデレーター：アダム・スミス	2 B：イノベーション 「長寿社会に関する新たな技術と政策」 ティム・ハント、サラ・ハーバー、石山 洸、山海 嘉之、 モデレーター：原山 優子
15:55	コーヒーブレイク	

5. 未来に向けて

16:25 講演「獲得免疫の驚くべき幸運」
本庶 佑

16:40 ノーベル賞受賞者による総括パネルディスカッション「明るい未来への展望」
エリザベス・H・ブラックバーン、アンガス・ディートン、本庶 佑、ティム・ハント、ランディ・シェックマン、
モデレーター：アダム・スミス

10:45 導入講演「人口高齢化を重視すべき理由」
サラ・ハーパー



11:00 パネルディスカッション
「長寿社会における生き方」
アンガス・ディートン、秋山 弘子、齋藤 安彦、
モデレーター：アダム・スミス



11:20 インタビュー
「人に寄り添う革新的サイバニクス技術」
山海 嘉之、インタビュアー：サラ・ハーパー



リハビリ歩行訓練等に使用されるロボットスーツの実演を通してサイバニクス技術を紹介。

11:35 対話
「21世紀における罹患率と死亡率」
アンガス・ディートン、アン・ケース



11:55 パネルディスカッション「なぜ私たちは歳を取るのか」
エリザベス・H・ブラックバーン、ティム・ハント、トム・カークウッド、モデレーター：アダム・スミス



12:15 対話「楽しく賢く歳を取る」
ティム・ハント、川島 隆太、
モデレーター：藤垣 裕子



脳トレの実演を通して、脳の認知機能を維持する方法について議論。

12:30 講演
「パーキンソン病原因解明への挑戦」
ランディ・シェックマン



14:10 分科会

1 A : 生命科学「長寿に関する研究の最先端」

ランディ・シェックマン、トム・カークウッド、高橋 淑子、
モデレーター：アダム・スミス



2 A : 社会「幸福に長生きできる社会とは」

アンガス・ディートン、サラ・ハーパー、岩本 康志、
モデレーター：藤垣 裕子



1 B : 健康「健康寿命を延ばすには」

エリザベス・H・ブラックバーン、伊藤 裕、トム・カークウッド、
モデレーター：アダム・スミス



2 B : イノベーション「長寿社会に関する新たな技術と政策」

ティム・ハント、サラ・ハーパー、石山 洸、山海 嘉之、
モデレーター：原山 優子



16:25



講演「獲得免疫の驚くべき幸運」
本席 佑

16:40 ノーベル賞受賞者による総括パネルディスカッション「明るい未来への展望」

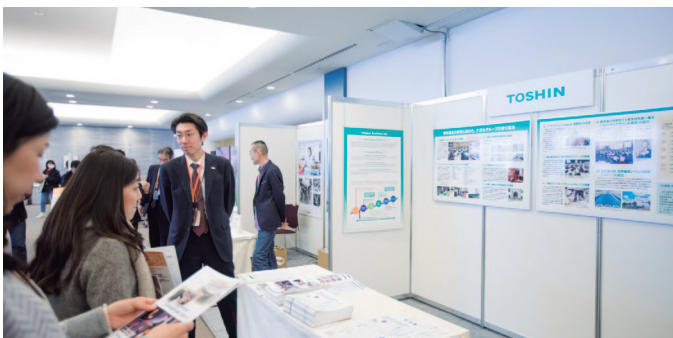
エリザベス・H・ブラックバーン、アンガス・ディートン、本席 佑、ティム・ハント、ランディ・シェックマン、
モデレーター：アダム・スミス



レセプション

高円宮妃殿下、レセプションへの御臨席

当日イベント終了後に続いて行われたレセプションにおいて、高円宮妃殿下御臨席の栄誉を賜りました。妃殿下はノーベル賞受賞者の方々や、若手研究者とご歓談になりました。





エリザベス・H・ブラックバーン

2009年ノーベル生理学・医学賞
ソーク研究所 名誉会長
カリフォルニア大学サンフランシスコ校
モリス・ハースタイン冠講座生化学・生物
物理学部門 名誉教授

テロメア分野・テロメラーゼ研究の第一人者。2009年「テロメアとテロメア合成酵素による染色体保護の仕組みの発見」によりノーベル生理学・医学賞共同受賞。



アンガス・ディートン

2015年アルフレッド・ノーベル記念経済学
スウェーデン国立銀行賞
プリンストン大学ウッドロウ・ウィルソン
・スクール 上席研究員兼ドワイト・D・
アイゼンハワー経済国際関係 名誉教授
南カリフォルニア大学 プレジデンシャル
プロフェッサー

健康、経済発展、貧困、格差、福祉等を専門分野とする。2015年、「消費、貧困、福祉」に関する分析に対してアルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞を受賞。2016年、経済・国際関係に関する貢献に対して、ナイトの称号が授与された。



本庶 佑

2018年ノーベル生理学・医学賞
京都大学 高等研究院 副院長・特別教授
公益財団法人神戸医療産業都市推進機構
理事長

京都大学医学部卒業後、京都大学医学研究科博士課程修了。東京大学医学部助手、大阪大学医学部教授、京都大学医学部教授を経て、現在、京都大学高等研究院副院長・特別教授。免疫抑制の阻害によるがん治療法の発見により、2018年にノーベル生理学・医学賞を共同受賞。



ティム・ハント

2001年ノーベル生理学・医学賞
沖縄科学技術大学院大学 客員研究員

2010年の退職まで、英国キャンサーリサーチのクリアホール研究所における主要な研究者の一人として活躍。1982年に「細胞周期の主要制御因子」の構成要素となるサイクリンを発見。この功績により、2001年にノーベル生理学・医学賞を共同受賞。



ランディ・シェックマン

2013年ノーベル生理学・医学賞
カリフォルニア大学バークレー校 教授
ハワード・ヒューズ医学研究所 研究員

真核生物の細胞膜輸送の仕組みを遺伝子及び生化学レベルで研究。ガードナー国際賞、アルバート・ラスカー基礎医学研究賞を受賞し、2013年ノーベル生理学・医学賞をジェームズ・ロスマン、トーマス・スードフと共同受賞。



秋山 弘子

東京大学高齢社会総合研究機構
特任教授

イリノイ大学で Ph.D(心理学) 取得、米国国立老化研究機構フェロー、ミシガン大学社会科学総合研究所研究教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授(社会心理学)、東京大学ジェロントロジー寄附研究部門教授、日本学術会議副会長などを経て、2009年4月から現職。専門は老年学。超高齢社会におけるよりよい生のあり方を追求。



アン・ケース

プリンストン大学 1886年アレクサンダー・スチュワート経済・公共問題学 名誉教授
同大学開発学 リサーチ・プログラム・ディレクター

ライフコースの観点からみた健康について広範な研究を行う。国立小児保健発達研究所(アメリカ国立衛生研究所) 顧問、アメリカ国家科学賞委員、国家統計局委員を務める。



藤垣 裕子

東京大学大学院総合文化研究科・
教養学部 教授

1990年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士(学術)取得。同年4月東京大学教養学部基礎科学科第二助手。1996年10月科学技術庁科学技術政策研究所主任研究官。2000年4月東京大学大学院総合文化研究科助教授、2010年1月同教授。専門は科学技術社会論。



原山 優子

東北大学 名誉教授

ジュネーブ大学経済学部助教授(1998-01)、経済産業研究所研究員(2001-02)を経て、東北大学大学院工学研究科教授(2002-13)。総合科学技術会議非常勤議員(2006-07)、経済協力開発機構(OECD)科学技術産業局次長(2010-2012)を経て、総合科学技術・イノベーション会議常勤議員(2013-18)。教育学博士、経済学博士(ジュネーブ大学)。



サラ・ハーパー

オックスフォード大学 教授(老年学)

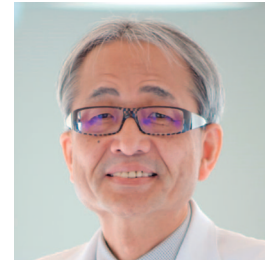
英国政府科学技術会議委員、同政府高齢化社会に関する検討会の議長を務める。年金政策研究所理事及び英国健康科学データ研究センター非常勤役員。2018年人口統計学への貢献により大英帝国勲章 CBE 受賞。



石山 洸

株式会社エクサウィザーズ
代表取締役社長
静岡大学 客員教授
東京大学政策ビジョン研究センター
客員准教授

東京工業大学大学院総合理工学研究科
知能システム科学専攻修士課程修了。リク
ルートホールディングスのデジタル化を推
進し、メディアテクノロジーラボ所長、リク
ルートAI研究所の初代所長を歴任。2017
年デジタルセンセーション株式会社取締
役 COO に就任し、合併を機に現職就任。



伊藤 裕

慶應義塾大学医学部
腎臓内分泌代謝内科 教授
慶應義塾大学医学部
百寿総合研究センター 副センター長

現在、日本高血圧学会理事長および日
本内分泌学会代表理事を務める。2022
年国際高血圧学会会長予定。2014年
高峰譲吉賞、2018年井村臨床研究賞受
賞。メタボリックシンドローム、慢性腎臓
病（CKD）の先制医療の開発を目指す。



岩本 康志

国立国会図書館 専門調査員

京都大学卒業、大阪大学経済学博士。
京都大学助教授、一橋大学教授、日本
学術会議会員等を歴任。東京大学大学
院経済学研究科教授から現在、国立国
会図書館に出向中。専門は公共経済学
で、主として高齢化社会の財政と社会保
障の在り方の研究に従事する。



川島 隆太

東北大学加齢医学研究所 所長

85年東北大学医学部卒業、89年東北大
学大学院医学研究科修了、スウェーデン
王国カロリンスカ研究所客員研究員、東
北大学加齢医学研究所助手、同講師、東
北大学未来科学技術共同研究センター
教授を経て06年より東北大学加齢医学
研究所教授。14年より東北大学加齢医
学研究所所長。



トム・カークウッド

ニューカッスル大学 名誉教授

加齢に伴う疾病等をはじめ、人は何故ど
のように老いるのかを研究。英国医学ア
カデミーフェロー。高齢化の観点から英
国政府や国際機関に助言を行うとともに、
ビジネス、専門分野や第三セクター
においても活躍。



齋藤 安彦

日本大学経済学部・日本大学人口研究所
教授

米国ロサンゼルス南カリフォルニア大学において Ph.D (社会学) を取得後しばらく同大学で働いたのち母校である日本大学に戻り、総合科学研究所、大学院総合科学研究科等を経て経済学部に着任、人口研究所研究員を兼任。



山海 嘉之

CYBERDYNE 株式会社
代表取締役社長 / CEO
筑波大学システム情報系 教授

人・ロボット・情報系が融合複合した新領域【サイバニクス】を創成し、世界初のサイボーグ型ロボット HAL を開発。2004 年、未来開拓型企業「CYBERDYNE」を設立し、世界初のロボット治療機器「医療用 HAL」が日米欧で医療機器承認を取得するなどイノベーションを起こしながら世界規模で事業を展開している。



アダム・スミス

ノーベル・メディア AB
チーフ・サイエンティフィック・オフィサー

オックスフォード大学、ハーバード大学、ハイデルベルク大学での研究員を経て、オックスフォード大学で発生神経科学の研究に従事。その後エルゼビア及びネイチャー・パブリッシング・グループの主任編集者及び出版者として科学出版に携わる。2006 年より Nobel Media の前身である Nobelprize.org に勤務。



高橋 淑子

京都大学大学院理学研究科
教授・理事補

1988 年京都大学で博士学位取得後、フランスのルドワラン教授の研究室でポスドク(1991 年まで)。「ラテン科学の洗礼」を受ける。さらに米国で 3 年間滞在した後、1994 年に帰国。理化学研究所チームリーダーや奈良先端科学技術大学院大学教授を経て、2012 年から現職。2010 年第 30 回猿橋賞受賞。

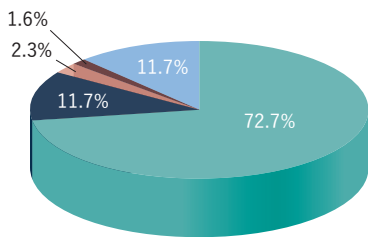
参加者データ

ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 には世界各国から 1,000 名が参加しました。また、会場での参加者だけでなく、多くの方がインターネット上のライブ・ストリーミングやソーシャル・メディアを通じてこのイベントに参加しました。ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 における全ての講演、パネルディスカッションは以下の URL からご覧いただけます。

(<https://www.youtube.com/nobeldialogue>)

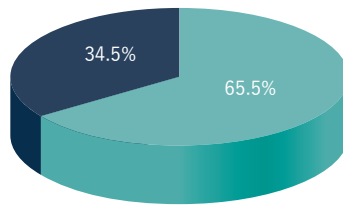
会場の参加者のうち、65.5% は日本から、34.5% は国外からの参加者であり、国際的なイベントとなりました。また、一般参加者のうち、学生あるいは大学・研究機関教職員の割合は約 50% で、分科会における質疑応答などにおいては、積極的な対話への参加がみられました。

参加者総数：1,000 名



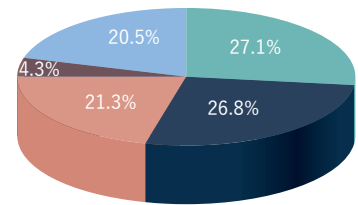
一般参加者	727 名
招待者	117 名
登壇者	23 名
報道機関	16 名
JSPS Fellows	117 名

国内外別参加者数



国内	655 名
国外	345 名

一般参加者属性

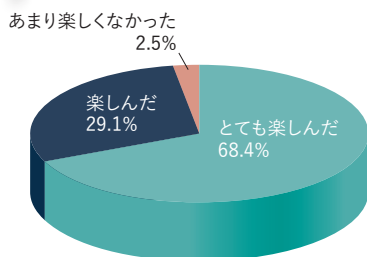


会社員・会社役員	197 名
学生	195 名
大学・研究機関教職員	155 名
公務員	31 名
その他	149 名

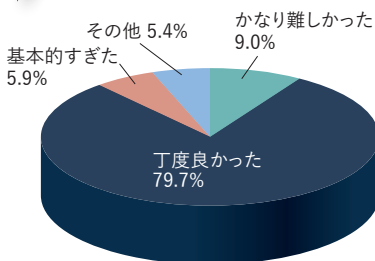
国・地域別参加者数

国名	人数	国名	人数	国名	人数	国名	人数	国名	人数
イタリア	6	カンボジア	2	チェコ	2	ハンガリー	1	マレーシア	3
イラン	3	キプロス	1	中国	32	バングラデシュ	7	メキシコ	1
インド	39	ギリシャ	2	チリ	1	フィリピン	7	モザンビーク	2
インドネシア	36	コロンビア	2	デンマーク	1	フィンランド	1	モロッコ	1
ウクライナ	5	シンガポール	1	ドイツ	6	ブラジル	4	モンゴル	1
英国	14	スウェーデン	12	トルコ	1	フランス	9	リトアニア	1
エジプト	1	スペイン	6	日本	655	米国	9	ルーマニア	2
オーストラリア	6	スリランカ	7	ニュージーランド	1	ベトナム	15	ロシア	2
オランダ	1	スロベニア	1	ネパール	4	ベネズエラ	2	その他	52
カナダ	3	タイ	11	パキスタン	2	ペルー	1		
韓国	5	台湾	5	パラグアイ	1	ポーランド	4		

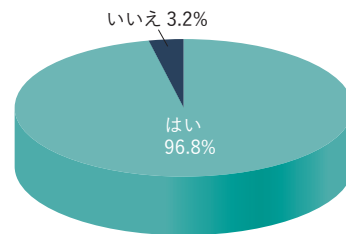
ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2019をお楽しみいただけましたか？



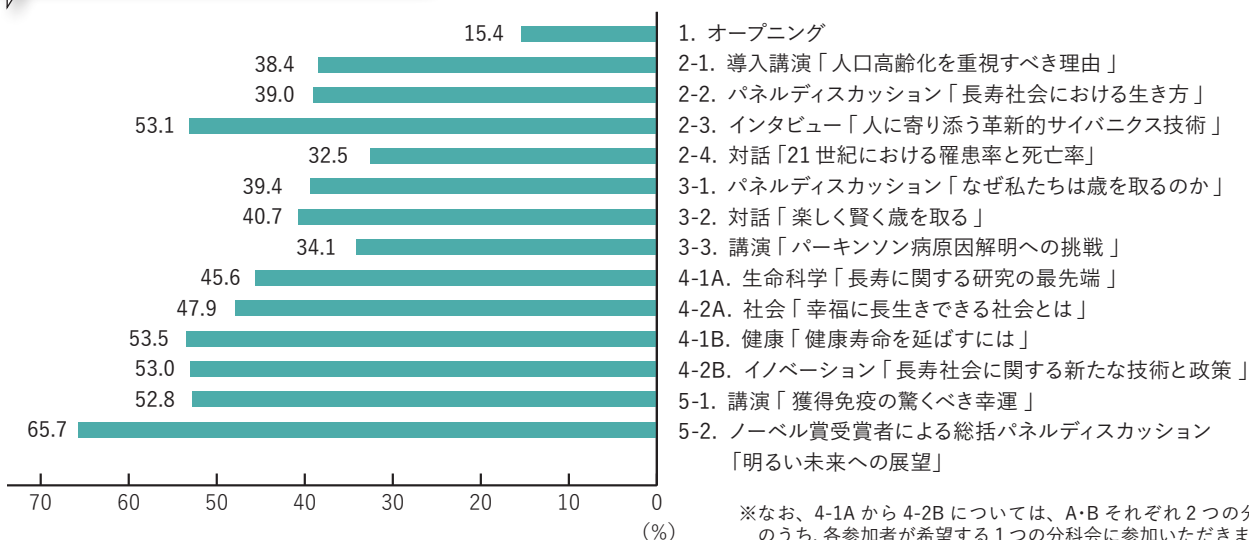
全体的な内容はいかがでしたか？



またノーベル・プライズ・ダイアログ東京に参加したいですか？



面白かったプログラムは何ですか？



プログラムに関するご意見

- ・このすばらしい機会に感謝します。今日のダイアログを聞いて、自分の生涯設計を考える契機になりました。
- ・このようなプログラムは科学に関心を持つ若い世代の激励になりますので、ぜひ聞いてもらいたいです。
- ・ノーベル賞受賞者や素晴らしい講演者から多くのことを学びました。プログラムの内容はちょうど良かったです。
- ・世界のそうそうたる研究者たちの話を国内で直接聴くことができたことは非常に有り難く、そして今の世界の重要な課題とその解決に向けて世界的なレベルの取組みを知ることができました。
- ・Adam Smith さんの司会・進行がすばらしかったです。未来に向けて希望がある終わり方で良かったです。私の家族に認知症の者がいるので、切実な問題として捉えていました。
- ・初めての参加でしたが、久しぶりにアカデミックな雰囲気にもまれて刺激をもらいました。好奇心を持ち続けることが若さを保つ秘訣だと思いました。

独立行政法人日本学術振興会

本会は、独立行政法人日本学術振興会法（平成 14 年 12 月 13 日法律第 159 号）に基づき、学術研究の助成、研究者の養成のための資金の支給、学術に関する国際交流の促進、その他学術の振興に関する事業を行うため、平成 15 年 10 月 1 日に設置された文部科学省所管の独立行政法人です。

本会の前身は、昭和天皇から学術奨励のため文部大臣に下賜された 150 万円により、昭和 7 年 12 月に創設された財団法人日本学術振興会であり、その後、昭和 42 年 9 月に日本学術振興会法に基づき、特殊法人となりました。70 年余にわたり我が国の学術振興を担う中核機関として様々な事業を展開してきましたが、平成 15 年 10 月、業務の弾力化・効率化を図り、研究者や学術研究機関へのサービスの一層の向上をめざして、独立行政法人として設置されました。

日本学術振興会は、我が国の学術振興の中核を担う機関として、科学研究費助成事業などの学術研究への助成や、特別研究員事業などの若手研究者養成を、研究者の自主性と研究の多様性を尊重しながら実施しています。また、世界に張り巡らされた学術関係機関ネットワークの主要な一員として、学術に関する国際交流の促進を積極的に行っています。

さらに近年は、大学改革を支援する事業も実施しており、学術研究の振興と人材育成のための活動を幅広く行う機関として発展を続けています。

日本学術振興会ウェブサイト <https://www.jsps.go.jp/index.html>

ノーベル・メディア AB

ノーベル・メディアは、ノーベル賞を受賞した業績についての知識を社会へ広め、アルフレッド・ノーベルのビジョンや遺産に沿って科学や文学、平和に対する関心を高める活動を行っています。同社は、ノーベル賞の公式デジタルチャンネル、ノーベルプライズコンサート、さらには世界中で開催される、ノーベル賞受賞者出演の示唆に富んだ講演イベントなど、高品質な企画を提供しています。さらには、ノーベル賞授賞式に関する著作権のポートフォリオや映像の販売、生放送の配信権の管理も行っています。

www.nobelprize.org

Twitter: @NobelPrize

Facebook: www.facebook.com/nobelprize

YouTube: www.youtube.com/nobelprize

ノーベル・メディア® (Nobel Media®)、ノーベル賞® (Nobel Prize®) 及び Nobelprize.org® はノーベル財団の登録商標です。免責事項:ノーベル・メディアはノーベル賞受賞者の選考に直接的又は間接的に関与しません。選考手続はノーベル賞選考委員会によって、厳重かつ機密に取り扱われます。

ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 運営委員会

委員長

里見 進 独立行政法人日本学術振興会理事長

委員

秋山 弘子 東京大学高齢社会総合研究機構特任教授

伊藤 裕 慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科教授
慶應義塾大学医学部百寿総合研究センター 副センター長

遠藤 久夫 国立社会保障・人口問題研究所所長

川島 隆太 東北大学加齢医学研究所所長

※所属機関及び職名はノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 開催日時点のものです。

ノーベル・インターナショナル・パートナー



3M はノーベル・メディアとともに、科学教育の将来性と持続可能性などの地球規模の重要な問題に何年も光を当ててきました。このパートナーシップは、世界中の人々の生活に影響を及ぼす重大な問題について、皆様とともに学び、考え、意識することのできる機会を私たちに与えるものです。



ABB はパワーグリッド、エレクトリフィケーション・プロダクト、インダストリアル・オートメーション、ロボティクス & モーション事業における先駆的リーダーであり、公共、産業、交通、インフラ分野にサービスを提供しています。ABB は 130 年を越えてイノベーションを拡大させ続けることにより、ありとあらゆる場所に電力を供給すること、自然資源から製品にいたるすべての産業をオートメーション化するという二つの価値を提供するとともに、産業のデジタル化の未来を描いてきました。ABB は世界の 100 カ国以上に約 147,000 人の従業員を擁しています。



エリクソンは世界をリードするコミュニケーションテクノロジーとサービスを提供する企業です。当社は世界中の持続的な社会において、より自由に学び、働き、生活することのできる効率的でリアルタイムなソリューションを有したネットワーク社会を実現しています。現在、エリクソンネットワークは、世界の通信網のうちの 40% 以上を占め、25 億人以上の方が当社のネットワークカスタマーサポートを受けています。



スカニアは研究と発展に強く焦点を当て、効率的で高機能な輸送策とその革新を先導しています。スカニアがその広範にわたる対応力を維持し、自動車産業の先端の地位を保つていくために、3,500 名以上の研究者が代替燃料や接続性、自動化、電化といった未来の鍵となる分野の最前線で働いています。



ボルボ・カーズはスウェーデンで最も売上高の大きい企業の一つで、西スウェーデンにおいて自動車産業ハブの発展を推進しています。ボルボ・カーズは急速に変化する世界において、持続可能なモビリティ・ソリューションの発展を牽引し、持続可能かつ個人の安全な可動性を次世代に提供するために、自動運転技術、コネクテッド・サービス、電動化技術などの最新技術を活用しています。

特別スポンサー



東進ハイスクール・東進衛星予備校は、東京大学をはじめ難関大学への現役合格実績日本一、全国約 1200 拠点で、約 12 万人の生徒が通う現役大学受験予備校です。東進を運営する株式会社ナガセは、「独立自尊の社会・世界に貢献する人財を育成する」を教育理念に、中学受験の四谷大塚、水泳のイトマンスイミングスクール等を展開し、幼小中高大社の一貫した教育を通じて、次世代のリーダー育成に取り組んでいます。またフロンティアサロン財団の活動の支援を通じて将来の科学技術の発展に寄与する人財の発掘・育成に力を入れています。



ヤクルトは創業以来、「一人でも多くの人に健康を届けたい」という情熱を原動力に、目に見えない小さな生き物が秘める大きな可能性を追究してきました。そして、その成果を基に、乳酸菌飲料「ヤクルト」を始めとした多彩な食品、化粧品や医薬品事業を展開。今では「健康で楽しい生活づくり」につながる商品を、世界中の皆さまにご利用いただいています。

スポンサー



花王グループは、世界の人々の喜びと満足の豊かな生活文化を実現するとともに、社会のサステナビリティ(持続可能性)に貢献することを使命としています。1887 年の創業以来、清潔で美しく健やかな暮らしに役立つコンシューマープロダクツ事業と、さまざまな産業界の発展に寄与するケミカル事業において、世界の皆さまに製品をお届けしております。

後援：文部科学省、外務省、横浜市、スウェーデン大使館

寄附：一般社団法人全国スーパーマーケット協会、株式会社公文教育研究会、公益財団法人生存科学研究所、株式会社リコー、スウェーデンハウス株式会社

プレスリリース 4 件、JSPS ウェブサイト 5 件、JSPS メールマガジン 9 件、JSPS SNS (Facebook) 4 件、JSPS Researchers Network 2 件

プレスリリース

- 第 1 回 2018 年 12 月 10 日 ノーベル・プライズ・ダイアログ
東京 2019 開催告知
- 第 2 回 2019 年 2 月 4 日 参加登録受付開始
- 第 3 回 2019 年 2 月 15 日 取材登録について
- 第 4 回 2019 年 3 月 8 日 ノーベル・プライズ・ダイアログ
東京 2019 に高円宮妃殿下が
レセプション御臨席

JSPS メールマガジン (JSPS Monthly)



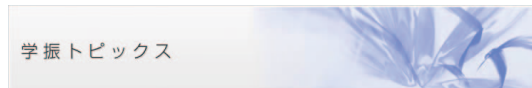
- ◇ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 広告協賛・寄附
のお願い
2018 年 8 月号 JSPS Monthly (学振便り)、
2018 年 9 月号 JSPS Monthly (学振便り)、
2018 年 10 月号 JSPS Monthly (学振便り)、
2018 年 11 月号 JSPS Monthly (学振便り)、
2018 年 12 月号 JSPS Monthly (学振便り) に掲載
- ◇ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 開催告知
2019 年 1 月号 JSPS Monthly (学振便り)、
2019 年 2 月号 JSPS Monthly (学振便り)、
2019 年 3 月号 JSPS Monthly (学振便り) に掲載
- ◇ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2019 開催報告
2019 年 4 月号 JSPS Monthly (学振便り) に掲載

JSPS Researchers Network



- 2018 年 12 月 11 日 開催告知
- 2019 年 5 月 30 日 開催報告

JSPS ウェブサイト (学振トピックス)



- 2018 年 7 月 17 日 ノーベル・プライズ・ダイアログ東京
2019 広告協賛・寄附のお願い
- 2018 年 12 月 10 日 ノーベル・プライズ・ダイアログ東京
2019 開催告知
- 2019 年 2 月 4 日 参加登録受付開始
- 2019 年 3 月 4 日 参加登録受付終了
- 2019 年 4 月 3 日 開催報告

JSPS Facebook

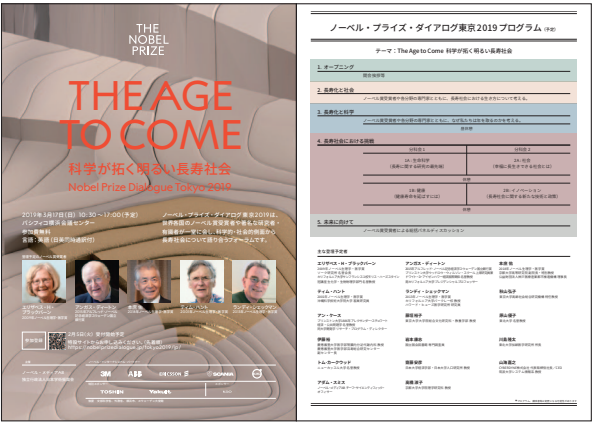
- 2018 年 7 月 17 日 広告協賛・寄附のお願い
- 2018 年 12 月 9 日 開催告知
- 2019 年 2 月 4 日 参加登録受付開始
- 2019 年 3 月 24 日 開催報告



ポスター (A2) 日・英



チラシ (A4) 日・英



特設ウェブサイト (日・英)



JSPS ウェブサイト (日・英)



当日配布プログラム (130 × 210mm) 日英併記全16頁



バナー (1,000 × 2,000mm)



ノーベル・プライズ・ダイアログ東京は、ノーベル財団の広報を担うノーベル・メディア AB がスウェーデンにおいて 2012 年から毎年ノーベル賞授賞式の前日に開催している一般向けの公開シンポジウムである「Nobel Week Dialogue (ノーベル・ウィーク・ダイアログ)」について、ノーベル側から日本での開催の可能性について打診があり、その後同財団や関係機関等との協議の結果、2015 年にスウェーデン国外では初めて日本において、日本学術振興会及びノーベル・メディアの共催により実施されました。

(下記の日本語タイトル、概要は、本会で翻訳したものです。)



2012 年 : The Genetic Revolution and its Impact on Society
「生命科学が拓く未来と社会的インパクト」

第 1 回目のノーベル・ウィーク・ダイアログでは、35 名のパネリストと 1,100 名の参加者がスウェーデンのストックホルムに集いました。遺伝学やゲノム科学における過去半世紀にわたる進歩を振り返り、今日の社会との関連を考えるとともに、将来の動向に目を向けました。



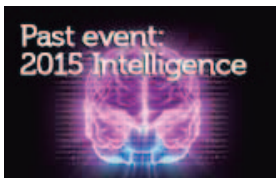
2013 年 : Exploring the Future of Energy
「エネルギーの未来を切り拓く」

初めてヨーテボリにおいて開催されたノーベル・ウィーク・ダイアログ 2013 では、エネルギーをテーマに、科学と社会の間に横たわる従来の境界線を越えた議論が行われました。



2014 年 : The Age to Come
「来たる高齢化」

第 3 回目のノーベル・ウィーク・ダイアログはストックホルムで開催され、科学的・文化的側面から老化について論じられました。平均寿命を延ばすことが人類最大の目標の 1 つであることに疑いの余地はありませんが、一方で世界的な高齢化が着実に進むことにより、新たな挑戦と機会の幅が広がります。



2015 年 : The Future of Intelligence
「知の未来」

知の未来は 2015 年にヨーテボリで行われたノーベル・ウィーク・ダイアログのテーマです。登壇者は「知とは何か」という問いについて、その多様性と複雑性、そして技術開発の急激な進展に焦点を当て、議論しました。



2016 年 : Your Plate - Our Planet : The Future of Food
「あなたの食卓、私たちの惑星：食の未来」

第 5 回目のノーベル・ウィーク・ダイアログはストックホルムで開催され、参加者と登壇者は国際的持続可能性、貧困、栄養不良、食料廃棄といった問題を含め、食に関する議論を繰り広げました。



2017 年 : The Future of Truth
「真実の未来」

第 6 回ノーベル・ウィーク・ダイアログはヨーテボリで開催されました。科学的手法、民主主義、政治など多様な観点から「真実」を見据える問題を提起した議論を広げました。



2018 年 : Water Matters

水は人類の存在に不可欠であり、どんな一滴も貴重です。2018 年のノーベル・ウィーク・ダイアログは私たちにとって重要なトピック―資源として、健康・環境・文化の中に潜む水の問題に焦点を当てました。

商標について

本誌上に掲載している名称、表題、トレードマーク、サービスマークおよびロゴは、ノーベル財団の登録商標または未登録商標です。これには、ノーベル賞® (Nobel Prize®)、ノーベルメダル® 意匠 (the Nobel Medal® design mark)、Nobelprize.org®、ノーベル・メディア® (Nobel Media®)、ノーベル博物館® (Nobel Museum®)、ノーベル博物館® (Nobelmuseet®)、ノーベル・ウィーク® (Nobel Week®)、ノーベル・ウィーク・ダイアログ (Nobel Week Dialogue) およびノーベル・プライズ・ダイアログ (Nobel Prize Dialogue) (合わせて以下「ノーベル財団商標」という) が含まれますが、これらに限定されません。ノーベル財団は、これらの商標の使用許可を最も厳しく制限しています。利用者は、ノーベル財団からの使用許可をあらかじめ書面で取得しない限り、ノーベル財団商標を使用することはできません。また、本誌上には、第三者の商標を掲載することもあります。利用者は、それらの商標の所有者からの使用許可をあらかじめ書面で取得しない限り、当該商標を使用することはできません。

本誌上のいかなる記載も、ノーベル財団商標を使用する権利または許可を明示的または黙示的に付与するものではなく、また本誌上のいかなる記載も、独立行政法人日本学術振興会 (JSPS) が第三者商標の所有者に代わって権利または許可を付与する権限を有すると解釈できるものではないことを、利用者は認識し、承認したものとします。なお、JSPS は、商標を使用する権利が有効なものであるかどうかを確認する責任も、利用者のために当該権利を保証する責任も負わないものとします。そのため、JSPS は、本誌上に掲載された情報を除き、住所、電話番号及びその他の連絡先を、商標使用の権利を有する第三者には提供しません。

著作権について

本誌上に掲載された写真、画像、図表、デザインおよび文書等の全部または一部 (以下「本コンテンツ」という) はすべて、ノーベル・メディア AB または JSPS の所有物、または法令もしくは第三者の同意に基づいて使用しているものです。

利用者は、JSPS からの使用許可をあらかじめ書面で取得しない限り、本コンテンツの複製、頒布、表示、送信、改変、翻案、もしくは本コンテンツの派生著作物を作成すること、またはその他の方法で使用することはできません。